

エクスタシーの論理（一）

—「故郷」としてのエクスタシーを求めて—

那須政玄

はじめに

第一章 自我の行方

第一節 創世紀における「自我の分裂」譚

第二節 十牛図に見る自我の実相

第二章 実体的自我を確信させ固定化させるものとしての文化装置

第一節 時間（歴史）の捏造

第二節 空間における他者の捏造

第三章 自我分裂の克服（自我統一）の諸相

第一節 同一的自我（自己同一性）の追求

第二節 エクスタシーとポゼッション（憑依）

（以上本号）

はじめに

「エクスタシー！」と叫んで爆笑を誘う大阪の芸人がいる。この芸人は、セックスに関わる「気持ちよさ」をエクスタシーと公然と言い放つことによつて笑いを取ろうとしているのである。「気持ちよさ」は、公序良俗に倫理に反することであり、それが言い過ぎであるのならば、個人の秘め事であり他言を憚ることである。

エクスタシーは、倫理を超えてしまう。倫理の文字通りの意味としての「倫(なかま)」としての「生き方」ということから考えるならば、エクスタシーは倫(なかま)からの逸脱として「個人的なもの」であり、またさらに個人といふことがそもそも倫(なかま)ということと関連して成立する概念であるのなら、エクスタシーは「個人をも超越した事柄」でもある。

倫理的であるとは、煎じ詰めて言えば、自我をしつかり保つて(自己同一性) 日常を生き抜くことである。だからこそ、エクスタシー(気持ちよさ)は、響きを買うのである。したがつて、「気持ちよさ」を伴うエクスタシーを理解するためのキーワードとは、「非日常性」、「無我」(無意識)であることになる。

倫理的に日常に生きることは、つまり変わらない自我をもちつつ世の中を渡つて行くこと、あるいは世の中を渡るのに十分な自我意識をもっていることは、「不安」なく生きるための条件である。「赤信号皆で渡れば怖くない」とは、信号を守つて道路を横断するよりも、たとえ赤信号でも皆と一緒に横断するほうが事故に遭わないということをも意味している。日常性、自我をもっていることとは、「皆と一緒に」ということである。

しかし、われわれが日常的に生きるためには、「気持ちよさの喪失」ということを代償として払わなければならない。

つまり気持ちよくなることを押さえて変わらない自己を必死に守ること（それが何のためかは明確ではないが）こそが自らもまた他人も一緒に安心していられる、という想念が日常性という名のもとに深く静かに蔓延してしまっている。したがって「気持ちよさ」を個人的な秘め事として公言しないことが、なかまに対しても「ある程度の安心感」を与えることになる。

「天の下に新しきものなし」とは、日常性という名のもとではすべての「経験」（たとえ極めて個人的な経験といえども）がすでに不特定多数の人間によって経験されてしまっている、という意味であるとともに、日常性を逸脱して「新しいもの」を求めるなという命令でもある。

エクスタシー (ecstasy) とは、語源的には *ex-stasis* で、「或る立場からの脱出」という意味である。「或る立場」とは、端的に「人間的な立場」すなわち「日常性」であり、それは人間にとって新しいものの発見のない「静止状態」である。つまり、人間的「倫（なにかま）理的」であらんとして（このことはすでに人間的な限定であり、分裂であるのだが）、人間的な分裂を意識しないで、あるいは意識しないように強制して、分裂の一つの項つまり自我に固執している状態が、エクスタシーである。

人間はもともと、自我に固執しつつもその自我から脱出したいというアンビバレントな態度をもっている。自我は自我が無くなる地点を求める。

動物には果たしてエクスタシー（「気持ちよさ」）はあるのか、という大問題がある。「瞬間という杭に結びつけられた」動物は、時間概念も日常性ももたなければまた自我をもつこともない。自我の確立（のさばり）に異常な嫌悪感をもつ者にとつて、自我なき動物の生き方が理想的な生き方になる場合もある。しかし、無我の連続する（常態としての無我をもつ）動物にとつて、「或る立場からの脱出 (exit)」という契機はない。常態としての「気持ちよさ」は、

常態であることよって「気持ちよさ」は無化される。

エクスタシーが、ある意味では、動物のようになることであるとしても、やはり「日常性からの脱出」であるかぎり、それは極めて人間的な事柄である。

われわれが公言するのを憚り、それでいて熱心に求めて止まないエクスタシー（「気持ちよさ」）、その論理化こそ人間のあるいは宗教の本質を知るための重要な一契機であると思われる。

第一章 自我の行方

ニーチェは「動物は瞬間という杭に結びつけられているから、人間のように憂鬱も退屈ももつことはない。一方、人間は、瞬間ではない持続の中に身を置きつつ、動物のような憂鬱も退屈もない状態を希求している。これは土台無理な話である」と語る。ニーチェに言わせれば、人間は人間であることを放棄しないかぎり（つまり少なくとも今までのような自我を中心に捉えた考えを放棄しないかぎり）真の意味で生を謳歌することもできないし、憂鬱や退屈から脱却することもできないのである。

憂鬱や退屈から脱却するための人間の最大の問題は、自我をいかに処理するかである。自我とは、分裂した二つの「自己」、つまり「自己」と「自己を意識する自己」の総体である。したがって、「自我をいかに処理するか」ということは、この分裂した総体としての自己からの解放・脱却、すなわち「自己の統一」をいかに達成するかである。

われわれ人間の自我は、分裂ということにおいて、さらにまたその分裂を何としてでも回避・克服せんとすることにおいて、はじめて自我たりうる。対象を認識しようとすることも、出会うものに名前を付けて自分のものにすることも、愛することも、「宇宙との同一性の経験」も、あるいは自分を無理やり同一不変な「私」と考えようとするこ

も、結局すべては、「自己の統一」を目指した人間の営為である。

しかし、われわれの常識は、自我をすでに統一を有しているもの、そして時に分裂することもあるものと考えていないであろうか。このような常識がまかり通るかぎり、精神分裂病はやはり異常であり、したがってその反対概念としての「健全さ」・「健康は、よいものとして維持される。そしていわゆる文化は、自我の同一性を暗黙の前提として、異常―正常、病―健康の見事な区別（差別）の体系をそのつど形成してきた。人間が自我をもつこと、つまり自我の同一性を保持しうるこそが、文化の根源であり、また人間の動物に対する優位の指標でもある。

「人間とは何か」という問いにとつて最大不可避の問題は、まさに「自我の問題」である。つまり人間とは何かという問いは、自我とは何かという問いに収斂する。エクスタシーという自我なき状態の論理を探る本論は、したがって必然的に人類はいかに自我の問題を処理してきたかということから始められなければならない。

この章においては、分裂した自己に気づきその原因を探るエピソードとして「創世紀」の「創造と墮罪」の記述を考察し、さらに自己分裂の克服の一つの方途を「十牛図」において見ることにしよう。

第一節 創世紀における「自我の分裂」譚

『旧約聖書』の「創世紀」は、天地創造に続いて、人間の自己分裂の原因を次のようなエピソードをもつて語る。

2—7 「その日ヤハウェ神は地の土くれから人を造り、彼の鼻に生命の息を吹きこまれた。そこで人は生きたものとなった。」

2—8 「ヤハウェ神は東の方のエデンに一つの園を設け、彼の造つた人をそこにおかれた。

2—9 「ヤハウェ神は見て美わしく、食べるによいすべての樹、さらに園の中央には生命の樹と善悪の樹を地か

ら生えさせた。」

2—15 「ヤハウエ神はその人を取って、エデンの園におき、これを耕させ、これを守らせた。」

2—16 「ヤハウエ神は人に命じて言われた、へ君は園のどの樹からでも好きなように食べてよろしい。」

2—17 しかし善悪の智慧の樹からは食べてはならない。その樹から食するとき、君は死なねばならないのだ。」

2—18 「さてヤハウエ神が言われるのに、へ人が独りでいるのはよくない、わたしは彼のために彼にあはれしい助け手を造ろう。」

2—21 「そこでヤハウエ神は深い眠りをその人に下した。彼が眠りに落ちたとき、ヤハウエ神はそのあはれ骨の一つを取って、その場所をふさいだ。」

2—22 「ヤハウエ神は人から取った肋骨を一人の女に造り上げ、彼女をその人のところへ連れてこられた。」

2—23 「その時、人は叫んだ、

へついにこれこそわが骨から取られた骨、

わが肉から取られた肉だ。

これに女おんなという名をつけよう、

このものは男おとこから取られたのだから。」

2—24 「それゆえ男はその父母を離れて、妻に結びつき、一つの肉となるのである。」

2—25 「人とその妻とは二人とも裸で、たがいに羞はじなかつた。」

3—1 「さてヤハウエ神がお造りになった野の獣の中で蛇が一番狡猾であった。蛇が女に向かって言った、へ神様が君たちは園のどんな樹からも食べてはいけなうと言われたというが本当かね。」

3—2 「そこで女は蛇に答えた、園の樹の実を食べてもよろしいのです。

3—3 ただ園の中央にある樹の実について神様は、それをお前たち食べてはいけない、それに触れてもいけない。お前たちが死に至らないためだ、とおっしゃいました。」

3—4 「すると蛇が女に言うには、君たちが死ぬことは絶対にならないよ。

3—5 神様は君たちがそれを食べるときは、君たちの眼が開け、神のようになり、善でも悪でも一切が分かるようになるのを御存知だけのことさ。」

3—6 「そこで女はその樹を見ると、成程それは食べるのによさそうで、見る眼を誘い、智慧を増すために如何にも好ましいので、とうとうその実を取って食べた。そして一緒にいた夫にも与えたので、彼も食べた。」

3—7 「するとたちまち二人の眼が開かれて、自分たちが裸であることが分かり、無花果樹いちじくの葉を綴り合わせて、前垂を作ったのである。」

3—8 「夕方の風が吹く頃、彼らは園の中を散歩して居られるヤハウエ神の足音を聞いた。そこで人とその妻とはヤハウエ神の顔を避けて園の樹の間に隠れたのであった。」

3—9 「ヤハウエ神はその人に呼びかけていわれた、君はどこにいるのだ。」

3—10 「彼は答えた、貴神あなたの足音を園の中で聞いて恐ろしくなりました。わたしは裸だからです。それで身を隠したので。」

3—11 「ヤハウエ神が言われるのに、誰が一体君が裸だということを君に知らせたのだ。わたしがそれを食べてはいけないと命じておいた樹から君は食べたのか。」

3—12 「人は答えた、へあなたがわたしの側そばにお与えになったあの女が樹から取ってくれたのでわたしは食べたの

です。」

3—13　そこでヤハウエ神は女に言われる、
「君は一体何といたことをしたのだ。女は、
へ蛇がわたしをだましたのです。それでわたしは食べたのです」と答える。」

3—14　「ヤハウエ神は蛇に向かつて言われた、
へお前はこんなことをしたからには、
他のすべての家畜や野の獣よりも呪われる。

お前は一生の間腹ばいになって歩き、
塵を食わねばならない。

3—15　わたしはお前と女の間、
おまえの子孫と女の子孫の間に敵対関係をおく。

彼はおまえの頭を踏み碎き、
お前は彼の踵に食い下がる。」

3—16　「さらに女に言われた。
へわたしは君の苦痛と欲求を大いに増し加える。

君は子を生むとき苦しまねばならない。
そして君は夫を渴望し、

しかも彼は君の支配者だ。」

3—17　「さらにその人に言われた、

「君が妻の言う声に聞き従い、わたしが食べてはいけないと命じておいた樹から取って食べたから、君のために土地は呪われる。」

そこから君は一生の間苦しつた食を獲ねばならない。

3—18 土地は君のために荆いばらと棘おどろを生じ、

君は野の草を食せねばならない。

3—19 君は顔に汗してパンを食い、

ついに土に帰るであろう。

君はそこから取られたのだから。

君は塵だから塵に帰るのだ。」

3—20 「さてその人は彼の妻の名をエバと名づけた。というのは彼女はすべての生けるものの母となったからである。」

3—21 「ヤハウエ神は人とその妻のために皮衣かわころもを造って彼らに着せて下さった。」

3—22 「さてヤハウエ神が言われるのに、へ御覧、人はわれわれの一人と同じように善も悪も知るようになった。

今度は手を伸ばして命の樹から取って食べて、永久に生きるようになるかもしれない。」

3—23 「ヤハウエ神は彼をエデンの園から追い出した。こうして人は自分が取られたその土を耕すようになったのである。」

3—24 「神は人を追い払い、エデンの園の東にケルビムと自転する剣の炎とおき、生命の樹への道を看み守らせることになった。」

I 中間状態としての「人」(アダム)

ここで述べられているのは、神による「人(アダム)」の創造↓神による「エデンの園」の創造↓神による「園の内実」(「食用の樹」と「生命の樹」と「善悪の樹」)の区分↓神による「人」の「助け手(エバ)」の創造↓蛇によるエバへの誘惑↓エバとアダムの誘惑への敗北↓エバとアダムの羞恥心の発生↓神の命令に背いたことによる神への恐れ↓蛇・エバ・アダムに対する神の罰↓アダムとエバが知恵を持ってしまったことによる神の彼らのエデンからの永久追放、である。

しかし、神による「人の創造」はすでに1—26—27においてなされている。

1—27神は人を御自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。

つまり、天地創造、生物の創造、そして「生物としての人」の創造という経過の中で、「土くれから人が造られる」以前にすでに人の創造はなされているのである。しかし、「生物としての人」の創造は、なんら材料を必要としないままにただ神の意志のみによる創造である。

真の人(アダム)の創造は、エデンの園を地から区別しつつ創造したことと相即的である。エデンに置かれるべき人として、人は「生命の息を吹き込まれ」まさに「人」となるのである。しかし、真に人(人間)となるためには、まだまだいくつかの段階を経なければならず、最終的にはエデンを追われるところまで至らなければならぬ。

創世紀の2—3章、つまり人の創造から墮罪までの叙述は、人が「生物としての人」から「人間としての人」になるまでの階梯の叙述である。

エデンの園が設けられ、そこに置かれた人(アダム)は、すでに「限定された人」である。つまり、人はエデンに

において、すでに十分神の命令を聞く資質をもち、またすべての「食用の樹」から「生命の樹」と「善悪の樹」とを区別することが可能になっているのである。

しかし、人（アダム）はまだ自分自身を知らない。自分を知るためには他者を必要とする。この場合他者とは、神でもなければ他の生物でもなく、まず第一に他人でなければならぬ。それも「赤の他人」ではなく、自分と何らかの関係のある他人でなければならぬ。

そこで、人（アダム）の肋骨から「関係のある他人」（エバ）が造られた。P・トリプルが指摘するように「男性と女性に分かれるまでは（2—21—23）、アダムは基本的には両性具有、すなわち二つの性を具現化している一つの生物なのである」。両性具有であるかぎり、アダムは自分を知らず、またいわんやまだ男性でもない。

自分と関係のある他人が造られたとき、アダムには自らが向かうべき対象が明らかになる。しかし、この段階ではまだ動物のオスが自らの向かうべきメスを発見したと何ら変りがない。禁断の木の実を食べる以前の人は、生物としての人ではあるがまだ人間ではない。ただし、すでに述べたように、人は神の命令を聞く十分な資質をもち、またすべての「食用の樹」から「生命の樹」と「善悪の樹」とを区別することが可能であるという、人間になる可能性を有している。

キルケゴールは、人のこのようなすでに動物でもなければまだ人間でもない「中間状態」を『不安の概念』において次のように語る。

「この状態」負い目なきさにおいて精神が夢見ているとき」には、平和と安穩とがある。しかしそこには同時に或る別のものがある。それは不和や争いではない。なぜならそこには争うことができる何ものもないからである。それではある別のものとは何であるのか。無である。しかし無はどのような作用をもっているのか。

それは不安を生むのだ。負い目なさが同時に不安であること、このことが負い目なさの深い秘密なのだ。夢見つつ、精神は自ら自身の現実性を設計する。とはいえこの現実性は無なのだ。しかしこの無は負い目なさを絶えず自らの外に見る。」

「負い目なさにおいて人間は単に動物であるのではない。そもそも彼が自らの人生のある瞬間に動物であるならば、人間は決して生成してはこないであろう。それゆえ精神は「負い目なさにおいても」現存するのだ。しかし、直接的な精神として、つまり夢見る精神として、である。」

キルケゴールによれば、中間状態とは「無に対する不安」をもっている状態である。「負い目なさ」はすでに人に特有なものである。なぜなら動物は「負い目」と「負い目なさ」の区別がないほどの「完全なる負い目なさ」(これはすでに「負い目なさ」とも言えない)の中にいるからである。つまり動物は、無を知らないほどに「負い目なさ」を自らのうちに体現している。しかし人は、負い目なさの不安を通じて無を知っている。

中間状態においても、アダムはすでに人間的可能性を宿している。その可能性の証しは、「精神」である。人は精神をもっているからこそ、負い目なさの中でも不安を感じるのである。

しかし、可能性はやはりあくまでも可能性にとどまる。可能性が現実になるためには、つまり「負い目なさ」から「負い目」をもつに至るためには、一つの「出来事」が必要である。その出来事こそまさに禁断の木の実を食べるという行為である。

II 自己意識の発生

i エデンの園の両義性

神の命令は、「善悪の樹」からは食べてはならないということであった。この命令は人（アダム）に向かって下され、それをエバもアダムから聞いて知っていることになっている。負い目なさの不安の中で、アダムもエバも神の命令に聴従し、命令を破るということを露も思わない。

この静寂さを、人（アダムとエバ）ではない蛇が裂く。神の命令を聴くことができる「人」は、同時に蛇の誘惑にも耳を貸すことができる。エバが蛇の誘惑に負けるのであるが、それはエバだけの責任ではない。まだ責任を取るべき「主体」はどこにも確立してはいない。「人」が両性具有的であるのは、女性が創造されたときをもって終わるわけではない。というのも、まだ自己意識が発生していないかぎり、アダムとイブは個としては存在せず、ただ「人」（人類）を生きるのみで、「一つの肉」であるからである。したがって蛇のイブへの誘惑は、同時にアダムへの誘惑でもある。「人」は神の命令を素直に聴くように、蛇の誘惑も素直に聴く。彼らは意志をもって、蛇の誘惑を選択したわけではない。

しかし、「人」にとって他者である神の命令の声・蛇の誘惑の囁きは、一つである「人」を分裂させる契機になっている。

神の命令に背いて禁断の木の実は食べられてしまった。「その樹から食べるときは、君は死なねばならないのだ」と言われるように、神からすればこの行為は死を意味している。しかし、また「……君たちがそれを食べるときには、

君たちの眼が開け、神のようになり、善でも悪でも一切が分かるようになる」と言われるように、蛇からすればこの行為は人間への目覚めの第一歩なのである。

神は、エデンの園に居ることこそが最上の幸せであると語る。一方、蛇は、エデンの園においては人はただ神のみとの自由を享受するのみであると唆す。神は自らが造ったエデンの園を中心に据えて、その外には死があるのみであると語り、蛇はエデンの園の外に依拠してエデンを眺める。

両義性が発生するのは、一つの事柄を互いに対立する側面から眺めるからである。パルメニデスが言うように、一つの坂道を上から降りれば「下り坂」であるし、下から登れば「上り坂」であるようなものである。そして人間は、大抵どちらかの側面に与みしてしまうものである。

E・フロムは、『旧約聖書』について次のように語る。

『旧約聖書』では、人間は根源的に墮落しているという立場をとらない。アダムとイブが神に(違背)(Disobedience)したことは罪とは呼ばれない。この違背が人間を墮落させたとは、どこにもほのめかされていない。逆に、この違背は人間が自らの意識をもつこと、つまり人間の選択しうる能力の条件であり、煎じつめれば、この最初の違背行為とは、自由に向かう人間の第一歩である。この違背は主の御業であったとさえ思われる。なぜなら預言者によれば、人間は楽園を追放されたからこそ自己の歴史を作り、人間の能力を発展させ、まだ個として目覚めなかつた昔の調和に代り、十分発達した個人として、人間と自然との新たな調和に到達しうるのである。⁽³⁾

人間が人間たる指標、すなわち自己意識をもつて居ることを肯定しようとするならば、すべての出来事はそのことへ向けて整序される。エデンの園の外にこそ人間が真に生きる場があると考えようとするれば、神の命令も蛇の誘惑も

人がエデンの外へ出るための契機になる。神が命令さえしなければ、人は「善悪の樹」を知ることもなく、敢えてそれから実を食べようとはしなかったはずである。そしてそのかぎり、蛇の誘惑は、誘惑ではなく単なる蛇の咬きにすぎなかったであろう。

ii 智慧・羞恥・自己意識

禁断の木の実・善悪の樹の実を食べると人の「智慧が増した」。この智慧とは一体何なのであろうか。智慧の実態は、禁断の木の実を食べる以前と以後との人の在り方を見れば分かる。食べる以前には、「人とその妻とは二人とも裸で、たがいに羞はじなかつた」と語られ、食べた以後には、「するとたちまち二人の眼が開かれて、自分たちが裸であることが分かり、無花果樹いちじくの葉を綴り合わせて、前垂を作つたのである」と語られる。

アダムとエバは、裸でいることが恥はずかしくなつたのである。恥はずかしさの源は、見られている自分を意識することである。つまり、自らのうちに「他者の眼」をもち、自分自身で自分を対象化してしまうことである。

自分と関わりのある「他者」の発生は、自己意識の発生と同じことである。そして自己意識の発生は、「自分」と「自分を見ている自分」との分裂を意味している。恥はずかしさは、自分を自分の外から眺めて、自分を対象化してしまうことにおいて生ずる。

会田雄二は、自らの捕虜体験の中でのおもしろいエピソードを紹介している。

その日、私は部屋に入り掃除をしようとしておどろいた。一人の女が全裸で鏡の前に立つて髪をすいていたからである。ドアの音にうしろをふりむいたが、日本兵であることを知るとそのまま何事もなかつたようにまた髪をくしけずりはじめた。部屋には二、三の女がいて、寝台に横になりながら『ライフ』か何か

を読んでいる。なんの変化もおこらない。私はそのまま部屋を掃除し、床をふいた。裸の女は髪をすき終ると下着をつけ、そのまま寝台に横になってタバコを吸いはじめた。

入って来たのもし白人だったら、女たちはかなきり声をあげ騒ぎになったことと思われる。しかし日本人だったので、彼女らはまったくその存在を無視していたのである。

……もちろん、相手がビルマ人やインド人であってもおなじことだろう。そのくせいギリス兵には、はにかんだり、ニコニコしたりでむやみと愛嬌がよい。彼女たちからすれば、植民地人や有色人はあきらかに「人間」ではないのである。それは家畜にひとしいものだから、それに対し人間に対するような感覚を持つ必要はないのだ。どうしてもそうとしか思えない。¹⁾

通常、われわれは動物に対して羞恥心をもたない。相手が人間であるとき、そして少なくともその相手が自分と関係があると認知したとき、見られている自己を意識して、羞恥心をもつ。

自己意識とは、このように他者を媒介にして自らのうちに自分で形成する自己の像である。そしてこれは単なる像にとどまってはいないで、実体化されていく。否、むしろ実体化されなければ、エデンの園を追われた人間にとつては、不安でたまらないのである。なぜなら、人はエデンの園では創造主である神に守られていたが（たとえ無意識的であるにせよ）、エデンの外では神に代わって別のもの、つまり自我に自らを依拠させ、自我によって自らを守らなければならないからである。意識的に自らが依拠するものを求めねばならなくなったこと、そのことが「人間」になつた標識である。

すでに神に守られてはいないという不安が人間に文化を造らせた。したがって、文化とは実体としての自我を維持するための見えざる装置なのである。死の想念も、やはり自我維持のための装置であり、自我をもつた人間が自らの

終りを先取りしつつ、そのことによつて「生きている実感」を得るために作り上げたものである。永遠性と普遍性を獲得した自我は、肉体の死をもつて、一応終了することをわれわれは了解している。なぜなら「自我ののさばり」をわれわれは別の想念をもつてはなかなかに解消することができないからである。もし人間が自我をもちつつ、「生命の樹」の実を食べて、永遠の生命をもつたら完全に動物から離れて神になつてしまふであらう。

神は人がエデンの園に近づき、生命の樹から実を食べることを拒否した。永遠の生命とは、人間が死を越えることを意味し、死を越えるとは「不死になる」ことでもあるし、また「死を意識しない」ことでもある。「不死になる」とは、自我をそのまま保持しつつ、肉体的にも滅びないことでもある。「死を意識しない」とは、自我を放擲してしまふことである。神による人間の生命の樹から実を食べることの拒否の真意が、いずれにあるのか定かではない。しかし、神は人間が禁断の木の実を食べた以上、人間でありつつけることを、すなわち自我を保持しつつ生きることを、人間に求めたのである。

『旧約聖書』は、人間が人間であり続けることを要求する。そしてもし人間が追放されたエデンへの帰還を求めようとするなら、むしろその願望の力をもつて、人間自らでエデンに代わる、人間による「偽—エデン」の創造を促しているようにも見える。

註

性解放とキリスト教（新教出版社）所収

(1) 『創世紀』関根正雄訳（岩波文庫）

(3) E・フロム『悪について』（紀伊国屋書店）

(2) P・トリプル「イブとアダム—創世紀2〜3章再読」『女

(4) 会田雄二「アロン收容所」（中公新書）